

Title	外国人人材の活用と日本語教育
Author(s)	大岩, 元
Citation	年次学術大会講演要旨集, 32: 814-815
Issue Date	2017-10-28
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/15008
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

外国人人材の活用と日本語教育

大岩 元（協創型情報空間研究所 慶應義塾大学名誉教授）

キーワード 日本語教育 岩崎美紀子 留学生教育

1. はじめに

日本の人手不足は深刻であり、特に情報技術や高度人材でそれが著しい。外国人でそれを補う必要があるが、壁になっているのは日本語である。日本の仕事を行なうには、日本の社会と文化の中で行なわなければならない。それには日本語が不可欠である。

しかし、現状の日本語教育は非効率であり、特に入門段階がひどい。その入門段階を今は現地で行なうために、その後の上達がおぼつかない。教育は、入門段階が一番困難で、そこで身についた間違っただけがその後も上達をさまたげる。

岩崎美紀子氏の日本語教育“MISJ”は、入門段階が画期的に効率的で、2時間×12日間の訓練で、日本語文を自由に作り出せるようになる。語彙は買い物や旅行の会話程度に限られるが、4か月の訓練で、大卒レベルの会話が可能になる。また、この方法の教師は4カ月で育成できるので、日本語人材を計画的に育成することができる。彼らをその後半年間インターンとして日本の仕事を体験してもらえば、日本人と全く同じレベルで仕事ができるようになる。人手不足は計画的に解消することができる。

以下、岩崎氏の日本語教育の特長とそれが可能になった理由の分析を行ない、その活用法を述べる。

2. 岩崎美紀子氏の画期的な日本語教育システム

岩崎美紀子氏が開発した日本語教育システム” MISJ (Mikiko Iwasaki's Systematic Japanese)”は、

1. 12日間で、日本語の作文力と
日常生活に最低限必要な丁寧語による会話力が身につく
2. 4カ月で、大卒レベルの仕事の On the Job Training を
日本語で行なえる日本語力が身につく
3. 優秀な人材であれば、教師の育成が
4カ月240時間（3時間×20日/月）で可能になる

という特長を持つ、画期的な教育システムである。20年以上にわたる数々の成功した試行結果が得られていますが、その詳細は、<http://www.ilpd.jp/>で確かめられる。特に上記1. の成果はトップページにあるドイツ人女性の「12レッスン修了後の会話ビデオ」は、YouTube で「岩崎美紀子、MISJ」と検索すれば、映像を視聴できる。

岩崎式日本語教育が成功したのは以下のような教育システム開発方針の結果と推測される。

- A. 基本的で応用範囲が広く、実用的なことから教える
- B. 必須項目を必ず習得できるよう必要十分な量の口頭訓練を行う
- C. 文法を重視するが、必ずその文法を活かせる具体的な場面や機能と結び付けて教える
- D. 実用に最低限必要十分な内容を教え、レッスン後に必ず会話力の進歩を実感させる
- E. 人間関係を理解させ、状況に応じて適切な表現を選択できるようにする
 - A. の結果として、習得した基本事項の復習がその後のレッスンで自動的に行われることになるので、基本事項の定着度が高まる。
 - B. の例としては数字の基礎である「1～10」の指導が挙げられます。「1～4」「5～7」「8～10」の3段階に分け、まず物を一緒に数える、自力で数えるをそれぞれ3回ずつ、4種の物で繰り返す。途中で「1～7」を、最後に「1～10」を習得状況に応じて復習するために、結果的に「1～4」などは30回以上繰り返すことになり、授業内でほぼ全員覚えることができる。決して面白い作業ではな

いため、教師には、この作業を楽しみながらやり遂げる技量が求められる。

C. D. は関係があり、学んだ文法に基づく実際の会話でどのように活かされるかが明確に分かるので、努力の成果として毎回進歩が実感でき、それにより学習意欲が持続するという好循環を生み出す。

市販されている標準的な教科書は会話を軸に文法を教えるのだが、MISJ は文法を軸として実用に耐えるだけの文法がパッケージで提供されている。ある機能を満たすために必要な文法の量が多く、1回のレッスンでカバーできない場合は2回目、3回目と徐々に機能を拡大していけるように設計されている。

E. については、2回目のレッスンで「目上・目下」、「うち・そと」の関係を教える。2014年度にNHKのEテレで放映され、2015年度、2016年度にも引き続き再放映されている岩崎氏監修の「使える！ 伝わる！ にほんご」でも、第1課でこのことが説明されている。

教育ビジネスの観点からすると、短期間に画期的な成果が得られることだけでなく、特長の3.にある教師の育成が他の追随を許さぬ点が重要である。従来の大学院教育では約2000時間、新宿日本語学校の方法では800時間が教師育成に必要となるが、これが4か月約240時間で済む。

最近のコンゴにおける画期的な成果として、日本語の学習者に、最終段階で最初の12レッスンの指導法も並行して訓練することが可能であることが分かりました。これにより途上国への展開の費用が大幅に改善できる。途上国では日本人教師のコストは大きな負担となり、教育ビジネスとして成立させるのはなかなか難しい。

中国で日本語を大学で学んだ人達に教師教育を行った結果、自分達が苦勞して学んだことが、これだけ明解に理解できたことが素晴らしいと感謝された。これは、岩崎さんが独自に日本語文法の体系を作り、教える内容については全て、その文法に基づいてなぜそう言うかという説明ができるようにした結果、可能になったことである。

岩崎式日本語教育は、外国語教育の方法論としても画期的なものになる可能性がある。この方法論で英語、中国語などの教育法を開発できるものと期待される。

3. 岩崎式日本語教育の活用

現在、日本では多くの分野で人手不足に陥っており、途上国ではそれを満たす人材が教育されていても、それを生かす場を見つけるのが困難である。このことは、情報技術等の高等人材では著しい。

日本で働くためには、日本人の持つ文化の理解が不可欠である。それは日本語を使いこなして仕事をするのでしか達成できない。日本語教育の量的な拡大は不可欠であり、それに応えられる日本語教育システムは岩崎式しか見当たらない。

岩崎式教育の最初の12日間の授業は画期的であり、それだけで、日本では高度人材として仕事することが可能になる。しかし、そこで問題になるのは、日本人がそのような簡単な日本語で自分の伝えたいことを表現することができないことにある。

日本人の意思疎通は、文化の共有によって最小の情報で意志疎通を行なえるように発達してきた。易しい言葉で自分の言いたいことを表現する訓練は受けていないのである。これに対して欧米の文化では、相手に合わせて話をするのが、幼少の頃から訓練されるので、このような事はあまり起こらない。日本人のためのソフトウェアを開発することになった米国人は、日本人に分る英語を話す訓練を受けた上で、日本の仕事をするのだそうである。

日本人の英語が上達しないのも、この点に関係している。易しい英語で全てを話すという視点が欠けている。日本の文化を反映して、難しい表現を覚えることが教育の中心課題となるからである。覚えた事はうまく言えても、覚えていないことが出てきたら、どうするかという教育が全くされていないので、実用的なコミュニケーションができない。

プログラミングも同じ理由で、普及しない。プログラミングで使われる文法も語彙も、必要最小限のものにする努力が続けられている。このため、日本の知識人は、これは簡単なことだからだれでもやればできると考えてしまう。実は、易しいことであっても、人間同志の会話とちがって、前提知識なしに、自分で全てのことを作り出さなければならない。この文化は、実は究極の異文化交流なのである。

日本の大学は、英語で教育することで、留学生を集めようとしているが、これが無意味であることにやっと気づき出している。留学生は日本に興味があって来ているのであり、日本語で日本の文化と社会を教育しなければ、効果がない。英語教育が必要なのは日本人学生である。

岩崎式日本語教育を使えば、こうした日本人が直面する人材不足は計画的に解消することができる。教師教育が4か月で可能だからで、計画的に日本語教育を拡大できる。日本語が完璧に話せる人を日本人と定義すれば、日本人は必要なだけ創ることができるのである。